

「ドボク」マニアの土木構造物鑑賞に関する解釈

加計 幸陽¹・福井 恒明²

¹学生会員 法政大学大学院修士課程 デザイン工学研究科 都市環境デザイン工学専攻
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, E-mail:koyo.kake.7n@stu.hosei.ac.jp)

²正会員 博士(工) 法政大学教授 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, E-mail:fukui@hosei.ac.jp)

ダムマニアや工場萌えなど、土木構造物や土木的な建築物を愛でる「ドボク」の概念が登場して以降、旧来批判されがちだった土木に対し好意的なマニアの視点は一般化しつつある。本研究ではこうしたドボク概念について、風景論に基づいてその構造を説明する解釈の提示を試みた。既往の風景論の枠組みではドボク概念や類似した現象を「新しい風景」と位置づけるが、新しいというよりもむしろ人間が元来持っている見方を拡張させた風景観が主流になっていることを指摘し、「童心に戻る」直接的なものの見方という解釈を提示した。

キーワード: ドボク, マニア, インフラツーリズム, 風景論, 土木景観

1. はじめに

(1) 研究の背景

2000年代後半、ダムや水門、ジャンクションなどの土木構造物や土木的な建築物の写真集が立て続けに出版され、本来インフラとしての機能を有する構造物を、インフラの機能を果たすこと以外(鑑賞など)の対象として認識し愛でる、「ドボク」の概念が登場した¹⁾。これを皮切りに今日に至るまで、SNSやマスメディアなどによりダムマニアや工場萌えなどが広まり、インフラツーリズムとして一般化するなど、高度経済成長期以降社会的に批判されがちであった土木に対する世論のまなざしも変化しつつある。土木業界においても、広報にしばしば「ドボク」の語を用いる²⁾など、ドボク概念の浸透を好機として社会的地位の向上に努めていると思われる事例がみられる。

2008年「ドボク・サミット」主催者の水門写真家・佐藤は、ドボクを「土木構造物のみならず土木の特性の一つである機能性重視という性格を持つ建築物(工場や団地など)まで含めた領域を示すために、無理やり定義された表現技法³⁾」と定義しており、その範疇は幅広い。

このドボクの特徴的な点の一つは、必ずしも愛でる対象が緻密に計画・デザインされた構造物や、景観に配慮された構造物とは限らない点である。例えば、写真家の大山は、日本橋の首都高地下化に対して「日本橋の風景は首都高があるからこそすばらしいものになっている。

(中略) そんなに(日本橋の上に)『空』がほしければ、

これまでインフラを重ねてきたこの地点の歴史を踏まえ、首都高の上にさらに橋を架ければいい⁴⁾」とまで述べており、首都高を景観の阻害要因とする世論の指摘と逆の立場をとっている。

このような立場の差異は、景観に対する単なる興味や視点の違いに留まらない。土木景観分野は高度経済成長期の構造物を、人々にどのような都市空間や風景を提供するかに無頓着だった⁵⁾、などとして批判してきたが、今日に至りむしろそれを評価する動きがドボクを通じて生じているのである。こうした視線は社会にも着実に拡大し、現代の土木景観分野の立場を問うている。

こうした中で、ドボクという概念を対象にその構造や世論との関わりを考察した研究は、比較的新しい概念であることもあり少ない。風景論においては、後述するようにドボクに類似の現象を取り扱って考察を行ったものが見られ、既往の風景に対する捉え方と比較して「新しい風景」として位置付けられているものの、佐々木がドボクについて「さらに議論が必要⁶⁾」と指摘したように、未だドボクの概念を読み解くには議論が十分でない。したがって、風景論においてもドボクの構造を説明できる新たな解釈の充実が切望されているといえる。

(2) 研究の目的

以上から本研究では、既往の風景論における諸言説を基礎に、ドボク概念の構造を説明する新たな解釈を提示することを目的とする。

2. ドボクにおける直接的なものの見方

(1) ものに対する直接的なまなざし

ドボクにおいて対象構造物を「愛でる」行為とは、人間がインフラを本来想定された用途機能とは異なる鑑賞などの方法で楽しむ行為といえる。そしてドボクを愛でるマニアたちの立場は、佐藤によれば「利害空間には全く関係のない存在であり、存在を要請されてもいない⁷⁾」ことから、工事・管理主体、地域住民、関係者、有識者（第三者）のどれでもない「鑑賞者」である、とされている。

ドボクの価値観を議論する上で着目すべき性質として、本研究では2点を取り上げる。それは、「直接的なものの見方」及びその「遍在」である。

先述の大山はドボク・サミットにおいて、ドボクの鑑賞ポイントを説明する際にしばしば用いられる「機能重視でこじやれていない」のが良いという説明を、実際には説明しやすいからそう言っているだけの「後付け」の説明だとした上で、「*見ている側からすれば、意匠を飾ってできた形なのか、機能重視でできた形なのか、その違いはそんなにない⁸⁾*」ことに言及した。すなわち、大山のドボクの捉え方では構造物の背後にある機能や設計思想を無視して構造物と切り離し、純粹にその形を視覚的に愛でていることが読み取れる。この価値観を本研究では「直接的なものの見方」と定義する。

さらに、大山は「*工場萌え*」のミクシイのコミュとか見ていると「*まわりに話せる人がいなかったけどコミュがあって、仲間がいてよかった*」とか、本を出したら「*自分だけじゃなかった、とても嬉しい*」みたいな人がいっぱいいて、そこで果たした役割というのはあると思います。つまり自分のまわりにはなくても、全国探したらダム好きはけっこういた。*団地好きもいる⁹⁾*」とも述べている。この言及から、構造物を愛でるドボクの思想は、2008年のドボク概念成立以前から顕在化せずとも日本国内で自然と発現していたことが読み取れる。すなわち、ドボクの基礎にある直接的なものの見方という価値観はドボク概念の広まりに伴って広まったものではなく、少なくとも2000年代以降の日本人には（全員とは言わずとも）もともと「遍在」していたことが指摘できる。

また、これらドボク概念に近い現象として、佐藤は赤瀬川原平の「超芸術トマソン」などに代表される「路上観察学会」や、そのルーツである今和次郎らによる「考現学」を指摘している¹⁰⁾。これらは、街の各種建造物に組み込まれたまま保存されている無用の長物的物件を発見したり、バラックの建物、看板や人々の服装など一見するとなんでもよいような対象にフォーカスをあてて観察を行ったりした活動である。トマソンの代表的な例とし

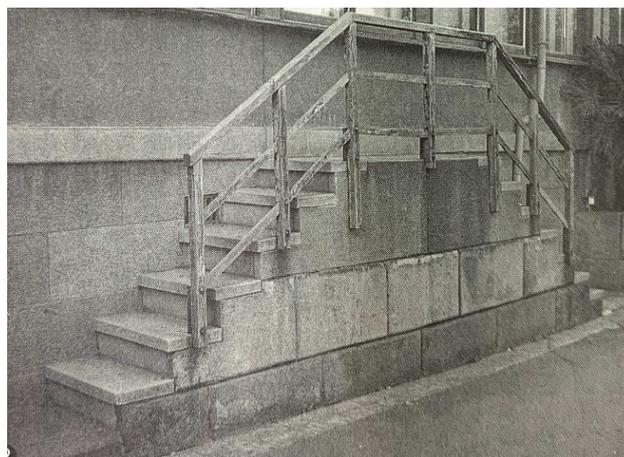


図-1 超芸術トマソンの一例「純粹階段」¹¹⁾

て、最初に発見された物件である「純粹階段」¹¹⁾などがある(図-1)。

赤瀬川は考現学における今和次郎たちの、「どの看板なら商品が売れるか」ではなく「*ブツとしての看板の面白さを収集する*」さまを「*ブツにチョコという姿勢¹²⁾*」と表現して説明している。つまり、考現学やその延長にある路上観察学会は、モノの背後にある機能や人間との関わりをモノと切り離し、純粹に面白いものとして楽しむ価値観を持っていると指摘したのである。

佐藤がドボクと近い現象に路上観察学や考現学を取り上げたのは、この価値観が先の大山の指摘にあったドボクのものの見方と共通していたからだといえることができる。すなわち、それぞれの現象における「ブツにチョコ」という直接的なものの見方を、佐藤は同一のものとして捉えたのだと考えられる。

(2) 風景論における新しい風景

風景論の諸言説では、こうしたドボクやドボクに関連した路上観察学、考現学等の現象は、17世紀以降西欧で発見された概念の延長としての風景などに対して、新しい風景としてしばしば位置付けられる。そして新しい風景が発見された契機として、社会環境の変化やそれに伴う人間自体の変化が挙げられている。

若林は、日本橋や新宿駅の風景を例に、現代は「弱い意味での景観（即時的景観）」が社会において支配的となり、見るべきものである「強い意味での景観（対自的景観）」が対自化される契機が世界の日常的なかかわりのなかから消去されている¹³⁾、と述べている。さらに若林はトマソンを取り上げ、強い意味での景観が無くなった都市空間に残る過去の生活の営みの痕跡を、強い意味での景観として「鑑賞」しようとした試みだと解釈している。

この若林の指摘に基づけば、社会の変化に対して赤瀬川のような一部の人間が抗ったことで、トマソンという

新たな風景を発見したと捉えることができる。一方で、この論はトマソンが面白みのあるものとして広まった理由や、直接的なものの見方で対象をまなざした理由を十分に説明しない。

類似の立場だがこれに踏み込んだものとしては、中川による論がある。中川は、主体を認識対象とする社会科学が発展する中で、路上観察学会のようにモノ自身に価値を見出すには、客観的認識の主体である人間も客体になることが求められると述べた¹⁴⁾。この中川の指摘の前提には、風景とは元来眺めと土地・風土を切り離して発見されたものであり、眺めから「意味」が失われた近代社会は風景価値を築くことが困難になった¹⁵⁾、という中川自身が整理した既往の風景論の基礎がある。中川はこの上で新しい風景を説明するために、「実景」「パラサイト」などの概念を援用しながら、現代の人々は自己が風景に同化していることを指摘した。この状態では、眺めに対する客観的な認識や判断が成立せず、「評価が存在しない」状態になっているため、背後に実態・オリジナルがない「シュミラークル」な場所が不可避なものになる¹⁶⁾という。

この中川の論は、元来の風景の捉え方では新しい風景を説明できないことを示した上で、新たな解釈を提示している。一方で「評価が存在しない」ことは確かに郊外の風景やディズニーランドゼイション的な風景を説明するかもしれないが、もはや一般世論にも価値観が周知され構造物に明確な客観的評価が存在するドボクにおいても同様かは判断が難しい。また、ドボクは人が構造物を評価し明確に「愛でる」域まで達しているのだから、あやふやな評価しかない「シュミラークル」なものの中での説明も困難だろう。

類似の指摘としてオギユスタン・ベルクは、新地方様式や新洋館など、その地域の風土とは離れた「まがいもの」の家などが増えていることなどを新しい風景として例に上げ、こうした現象を「造景の時代」の到来だと指摘した¹⁷⁾。ベルクは造景の時代において人間は、自身の主観性と事物の現実との関係を意識的に調和させ、環境に向けた自身の視線を客体化することで、風景と土地が切り離されたものであっても「環境をイメージとして生きる」ことができるようになる、としている。

このベルクの指摘は、主体の客体化という視点で中川と類似しているが、それによって生まれた風景を芸術作品の創造と同一視し、「模造と軽薄の時代にはならない¹⁸⁾」と楽観視し従前の風景論者を批判している点で、立場が異なっている。風景におけるあらゆる対象物を芸術作品とする考えは、風景が旧来のように土地とくっついたものでなくても成立するし、本来の機能と異なるやり方で「愛でる」現象を説明している。そして何より、造景

の時代の人間がこの風景の管理の仕方を獲得しているという考えは、ベルクによれば西欧のポスト二元論と東アジアの非二元論の総合であり、「人間の視線は自身から一層距離をおき（自身の主観性により意識的になり）、同時に事物に一層近づく（事物から人間を遠ざけていた二元論を超越）¹⁹⁾」というものである。この「事物に一層近づく」という見方こそ、直接的なものの見方に親しいのではないかと考えられる。

(3) 「童心に返る」鑑賞の方法

では、ベルクがいう環境をイメージとして生きる「造景の時代」において、直接的なものの見方はどのように捉えることができるのか。確かにドボクは構造物を芸術作品として見ているといえ一見説明が通っているように見えるし、トマソンはその名の通り「超芸術」である。一方で、芸術はその背景にあるなにかを考察しながら鑑賞したりする場合があるので、直接的なものの見方と同一とは言い切れないし、ドボク・サミットにおいて石川初も「「ドボク・エンターテイナー」の仕事からは、「アート」の匂いがほとんど（というかぜんぜん）しない²⁰⁾」と指摘している。なにより、わたしたちが普段から芸術を鑑賞する視線で世の中をまなざしているとは、あまり実感できないだろう。

ここで、「鑑賞」に関して美学分野における佐々木による指摘を取り上げる。札幌大通り公園には、イサム・ノグチが設計した「ブラック・スライド・マントラ」と名付けられた彫刻が存在する（図-2）。アートでありながら滑り台のようなオブジェで、中を滑ることができるようになっている。佐々木は、このマントラについて、子供は鑑賞せずに「何だろう」という好奇心を持って中に入ったり滑ったりするが、大人はこれをアートとして鑑賞したがる、ということ为例に、芸術の鑑賞とは「文化的に教育された行為」であることを指摘した²⁰⁾。すなわち、子供は形の誘いに素直に応じるが、大人はしきりによってそれを阻害されており、大人がしきり抜きに

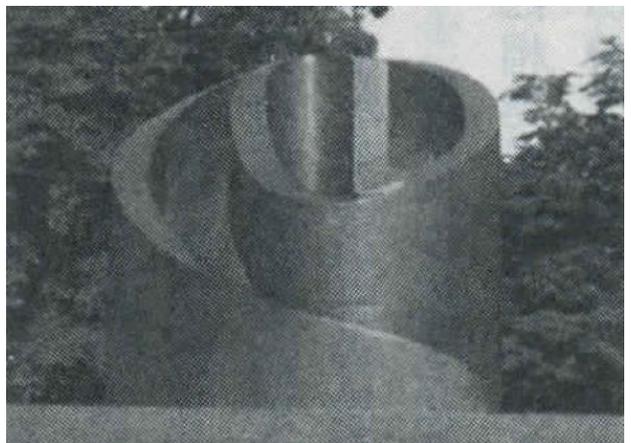


図-2 ブラック・スライド・マントラ²⁰⁾

素直に応じるには「童心に返る」必要がある、というのである。

ここでの大人の芸術における「鑑賞」とは、ドボクの「鑑賞」とは真逆の概念であることに気付かされる。ドボクの鑑賞とは直接的なものの見方なのだからむしろ、背後にある人間との関係性を切り離して構造物の形の誘いに素直に応じ、目に映るありのままを純粋に楽しむ、子供のような価値観と同義であるといえる。

路上観察学会においても、類似の指摘が存在する。「物件」を取り巻く秩序を無化しながら、「物件」それ自体を徹底して観察することを赤瀬川、藤森、南らは「路上観察の基礎は子供の目」とであると指摘²¹⁾し、私たちは「少年時代には戻れる²²⁾」ことにも言及しているのである。

そして、形の誘いに素直に応じることが子供の好奇心によってできる行動である、ということは、多くの人が人間の本能的な部分ではじめから形の誘いに素直に応じる能力を持ち合わせていることを意味する。つまり、ドボクに興味がある人のみならず人間のほとんど全員が直接的なものの見方を持っていることとなる。これは直接的なものの見方の「遍在」を説明する。

前節で「新しい風景」が「新しい」とされた理由は、先に紹介したような既往の風景論が、風景を“眺めの背景に土地や人間の生活などが関わっているもの”とする前提のもとで成立しているがゆえに、そこから乖離している現象を「新しい」としたからではないかと推察する。しかし、風景を見たときにその背景にある生業や歴史など子供の頃は考えないし、それでも子供ながらに風景に良さは見いだせるであろう。すなわち直接的なものの見方は、「新しい風景」というよりは、もともと誰しも持っていた幼少期の風景の見方が大人に至って拡張された現象と捉えられる。

そして、ドボクや路上観察学会において直接的なものの見方を獲得した人たちは、単に直接的に風景を眺めているのではなく、対象物を前にしていつでも容易に「童心に返る」ことができ、その視線と大人が持っている知識やこれまでの経験などを絶えず往復させながら見る風景を獲得していると考えられる。童心に返って構造物を眺めた上で構造物に対する知識や機能を後から付加価値として意識しながら愛でているのだとすれば、先述の大山の「後付け」の言及にも説明がつく。

3. ドボクの愛で方にみる「童心に返る」ものの見方の解釈

(1) 感性的な愛で方と「童心に返る」ものの見方

ここで、実際のドボクマニアの土木構造物に対する愛

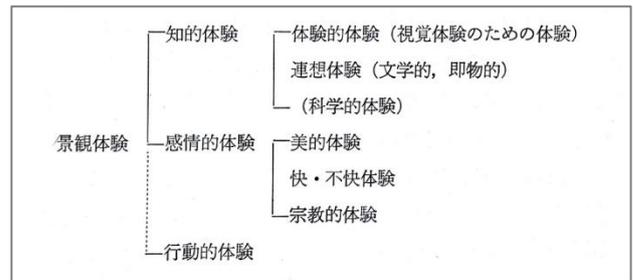


図-3 篠原による「景観体験」の分類²³⁾

で方を例に、ドボクにおける「童心に返る」ものの見方の痕跡をみる。

篠原は、自然風景知と庭園における体験をもとにわたしたちの風景体験を知的体験、感情的体験、行動的体験の3つに分けている(図-3)²³⁾。これに基づけば、このうち感情的体験には美的体験や快・不快体験が含まれるので、ドボクでは構造物そのものの迫力や造形などを視覚的に愛でる体験が当てはまるだろう。具体的なドボクにおける感情的体験の例としては、例えば、ダム「迫力」を語る場合²⁴⁾や、水門に施されている塗装の「色彩」を鑑賞する場合²⁵⁾などが挙げられる。他にも、八馬の「直線的なフォルムは、ガンダム的なかつこよさ²⁶⁾」や、萩原の「堤体を正面から見る集合住宅のようでもある²⁷⁾」という表現にみられるように、形をなにかに見立てて愛でるケースも存在し、これにも同様のことが言える。

そして知的体験には、構造物の機能や設計・構造への興味、構造物設置の歴史などを含めて愛でているケースが当てはまると考えられる。具体例としては、八馬の「使用する材料を最小化しつつ構造で対抗するものが好き²⁸⁾」という、設計思想を知らなければ成立しない機能美に関する愛で方などが挙げられる。

そして、ドボクにおける知的体験には何らかの工学的知識や歴史知識が必須と言えるが、ドボクにおける感情的体験はそれがなくとも成立し、単純にももの形をそのまま直接的に説明する。すなわち、ドボクにおける感情的体験は「童心に返る」状態でもものを見た体験で、しきたりやルールがなくても理解ができるような愛で方といえ、ドボクにおける知的体験は対象に知識を付加させて得た「後付け」の体験と捉えることができる。

また、ドボクにおける行動的体験としては、まるで中村良夫が提起した仮想行動のような体験をしている例が存在する。例えば、コンジットの補助ゲートに対する萩原の「あの通路歩いてみてえ」という表現²⁹⁾や、佐藤の「この橋は関係者以外通れません。らせん階段が見たいぞ。」という表現³⁰⁾など、本来立ち入れない構造物の場所に対して興味を持ち、もっと近くに立ち入りたいと考える例が挙げられる。これも、構造物に対する興味・好奇心から、子供心さながらに対象への近接を欲望する、童心に返った行動の一つと言えるだろう。

(2) ドボク特有の言語表現と「童心に返る」もの見方

ドボクのお愛で方のもう一つの特徴として、石川が「マニアの少数性」を自ら揶揄するような、セルフアイロニカルな笑い³⁰⁾と指摘したような、建造物の鑑賞のポイントを他者へ面白おかしく紹介する特有の言語表現が挙げられる。例えば、大山がジャンクションの近くにある施設名を援用して建造物を「今日からここがUSJ」と名付けたり³¹⁾、佐藤が赤い水門をかわいいと表現しながら「もし一戸建てだったら、庭にいっぱい建てたいな」と言及した³²⁾ような例が挙げられる。また、先述の感情的体験とも通じるが、鉄塔をその形状に応じて「ドラキュラ」や「ネコ」と名付けて見立てたりするような例³³⁾も同様である。

これらはいずれも、土木建造物そのものには元来笑いの要素が含まれていないことから、ドボクそのものが「笑い」と密接な関わりを持った対象へのまなざしの仕方であることを示している。そして、「童心に返る」もの見方が、この笑いを生み出す契機にあると考えられる。実際、子供の行動には多くの場合「笑い」がつきまとう。好奇心をもった対象を面白がり、興味を持って対象を追求する。大人においても、こうした童心の現れとして、笑いをもって楽しみながらドボクを鑑賞しているのではないかと考えられる。

類似の現象は路上観察学会にも見られる。そもそも路上観察学会はそれまで対象物の笑えるポイントにだれも気が付かなかったところを、それに気づいて笑いを言語化したものといえる。このため、あらゆる「物件」の紹介文にも、それを面白おかしく説明する文章が付加されている。また、南後が指摘したように、「純粹階段」「ヌリカベ」「原爆」などの名付けの言葉遊びが見られた³⁴⁾点もドボクと同様である。

4. ドボク概念の広まりと価値観の共有

(1) 共同体における風景の共有

ここまでで「童心に返る」直接的なもの見方という仮説を提示した。先に指摘したように、ドボク概念成立以前から土木建造物に対する直接的なもの見方は日本国内で「遍在」していたことから、この視点は特別なものではなく、少なくとも日本人のなかで共有されている共通の感覚であることが推察できる。しかし実際には日本人の全員がドボクを愛でるわけではないし、ドボクを理解できるのは一部の人たちに留まっている。この一部の人たちは、どのような経緯でドボクを愛でる価値観を獲得するに至ったのか。

風景の共有について、木岡は個人や集団における展開ごとに基本風景、原風景、表現的風景の3つに分類をして

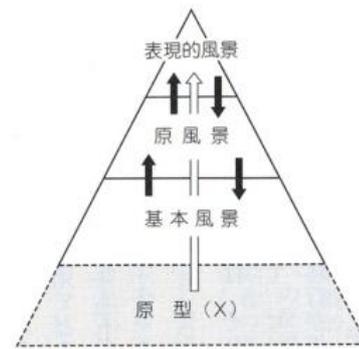


図-4 木岡による「風景の諸契機の構造」³⁵⁾

いる(図-4)³⁶⁾。基本的風景は個人における風景の展開、原風景は個人から集団への展開、表現的風景は集団から個人への展開を指している。そして木岡によれば、これらは相互に規定的で、基本的風景が原風景、表現的風景へと成立していく「上昇」の過程や、一旦成立した表現的風景が社会や共同体へ影響して原風景を規定し、さらに個人の基本的風景を規定する「下降」の過程が存在するとされている。

ドボクにおいては、先に指摘したような「遍在」があることから、風景の成立はどちらかという個人における展開が共同体の風景を作っていく「上昇」の過程に当てはまると捉えられる。そして、先の大山の言説にあったように、ドボクはSNS等を通じて拡大し認知されてきた経緯があることから、ドボクマニア本人たちの手による拡散の力に依るところが大きかったと考えられる。

(2) ドボクの広まりにおける「気づき」の必要性

清水は、風景を「地平だったもの」と定義している³⁷⁾。地平とは、ライプニッツの「微小表象」という広大な領域に多くの哲学者が与える術語であり、視界の注意の非主題的な対象である。したがってそれ単体を認識することはできない。この地平を「だったもの」と清水が表現したのは、地平が大半を占める視界の中でそれを破るなにかが私の注意を惹き、私が「振り向く」と、それまでは気づかなかったものが捉えられて視界全体がそれを中心に編成され組み換えが起こり、風景が姿を表す、という清水の風景の捉え方によるものである。このとき風景の経験が意味を与えるのは、今目の前に映るものではなく、「映っていた」ものとなる。「そうか、あれがここにあったのか、こういう場所だったのか」と、組み替えられ地平でなくなったものを地平として把握し直す作業であるゆえに、「地平だったもの」が風景だと述べられている。

この清水の指摘は、風景を見るには対象への「気づき」が必要であることを示唆している。ドボクにおいても、土木建造物という対象物を愛でる対象として見る価値観を認知して「振り向」かなければ、土木建造物は日常の

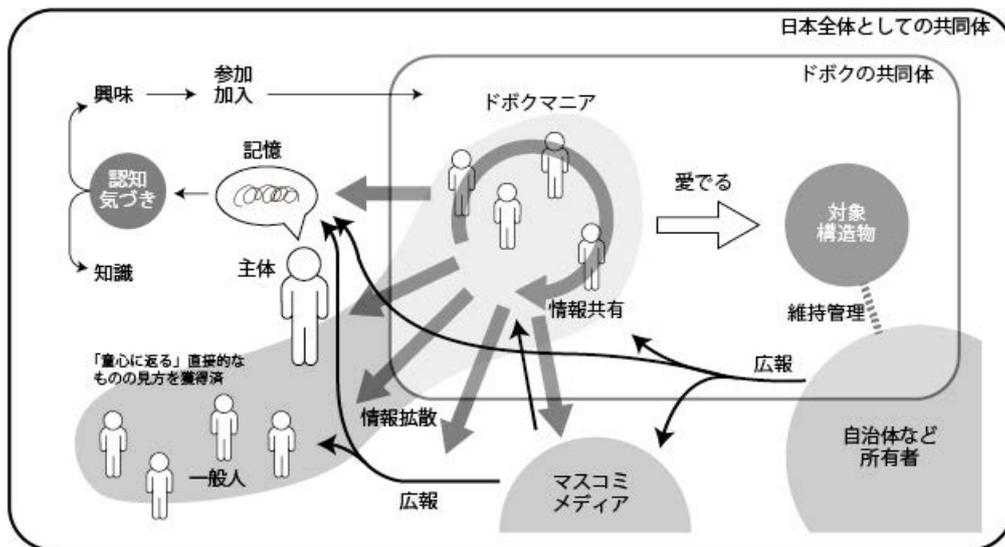


図-5 ドボク概念の広まりと価値観の共有(筆者作成)

なかで注意の非対象として何でもない存在のままである。そして多くの人が「童心に返る」直接的なものを見方を獲得しながらドボクを愛でるに至っていないのは、この「気づき」に至っていないことを意味すると考えられる。

この「気づき」については、単にドボクの価値観を知るだけではなく、鑑賞のポイントを認知したり、主体が対象構造物の魅力に共感したりできるかどうか重要だと考えられる。すなわち、ドボクマニアではない人間を「振り向」かせられるだけの情報量が主体の記憶に蓄積され、主体がそれに納得し共感する必要があるのである。

(3) ドボク概念の共有過程

以上から、ドボク概念が広まり価値観が共有される過程を考察整理し図化したものを図-5に示す。

まず「童心に返る」直接的なものを見方を獲得している人間のうち一部が、自治体やマスコミによる広報やドボクマニアからのSNS等による情報共有・拡散を通じ、記憶の中にドボクに関する情報を蓄積させていく。そしてその中でドボクとして土木構造物をまなざす方法が存在することに「気づき」、認知される。この結果としてドボクに興味を持つのか、そういう物があることを知識として知った上で特になんの行動も起こさないかは個人差で分かれると思われるが、興味を持たれた場合はドボクの共同体への参加加入意欲が生じ、ドボクの風景を生み出す一員になると考えられる。

5. 結論と今後の課題

本研究では、2000年代に生じたドボクという概念について、その特徴のうち「直接的なもの見方」とその「遍

在」の2点に着目し、この特徴が路上観察学会や考現学などととも共通することを指摘した。続いて、これらの現象が既往の風景論において「新しい風景」として位置付けられていることを確認した上で、ベルクの指摘する「造景の時代」という風景を芸術作品として捉える考え方がドボクをよく説明することを指摘した。このベルクの論を基礎に、佐々木による「鑑賞」の解釈から、人々が子供時代から獲得しているもの見方を大人になっても拡張し、大人の知識や経験との往復で風景を眺めるという、「童心に返る」直接的なもの見方の解釈を新たに提示した。3章ではこれに基づいて実際のドボクの愛で方からドボク概念の説明を試み、迫力・色彩などを愛でる感性的体験や、ドボク特有の面白おかしい言語表現が「童心に返った行動の一つとして説明できることを指摘した。また最後に4章で、「童心に返る」もの見方の「遍在」の中でドボクの理解者が一部の人々に留まっていることについて、清水の「地平だったもの」という風景の定義をもとに、ドボクの価値観に対する「気づき」の必要性によって説明できることを指摘した。

最後に、今後の土木景観分野について言及する。こうした風景の見方については、佐々木が「工場やジャンクションそれ自体が風景としてのアウラをもちえていることを意味していない」「風景意欲をそこによみとることを筆者はできない」と批判した³⁰⁾ように、多くの景観・風景論者にとって受容されにくい捉え方だと推察する。今後の土木景観分野に求められるのは、こうした現象を既往の風景論に囚われた解釈に留めず、「直接的なもの見方という風景も主流になりつつあるのだ」と受け入れる姿勢ではないか。これは昨今の「インスタ映え」などの議論なども多少通ずる。こうした風景の見方が世論を沸かせる中で、どのような態度をもって景観行政に臨むかがまさに問われていると考えられる。こうしたドボ

クと景観，両者の関係性についての考察を今後の課題とする。

参考文献

- 1) ドボク・サミット実行委員会：ドボク・サミット，武蔵野美術大学出版局，p.166，2009
- 2) 例えば，土木学会誌の裏見返し「モリナガ・ヨウの土木まくのうち」（2018～）や，土木学会主催「ドボクのラジオ」など。
- 3) 前掲1)，p.127
- 4) 大山顕：立体交差/ジャンクション，本の雑誌社，p204，2019
- 5) 福井恒明：土木が創り出す景観～景観に配慮した公共事業，2011 <https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/101163.pdf> [最終閲覧日2021年8月20日]
- 6) 佐々木葉：アウラなき時代の風景意欲，景観・デザイン研究講演集，No.5，p244，2009
- 7) 前掲1)，p.186
- 8) 前掲1)，p.127
- 9) 前掲1)，p.128
- 10) 前掲1)，p.185
- 11) 赤瀬川原平：超芸術トマソン，ちくま文庫，p.14，1987
- 12) 赤瀬川原平・藤森照信・南伸坊編：路上観察學入門，筑摩書房，p.8，1986
- 13) 若林幹夫：景観の消滅、景観の浮上，INAX出版，10+1，No.43，pp.126-135，2006
- 14) 中川理：風景学 風景と景観をめぐる歴史と現在，共立出版，p169，2008
- 15) 前掲14)，p.145
- 16) 前掲14)，p.189
- 17) オギユスタン・ベルク：日本の風景・西欧の景観そして造景の時代，講談社現代新書，p.171，1990
- 18) 前掲17)，p.188
- 19) 前掲1)，p.147
- 20) 佐々木健一：美学への招待増補版，中公新書，p.144，2019
- 21) 広島市現代美術館監修：路上と観察をめぐる表現史考現学の「現在」，フィルムアート社，p.140，2013
- 22) 前掲12)，p.104
- 23) 土木工学大系編集委員会：土木工学大系 1 3 景観論，彰国社，p.95，1977
- 24) 八馬智：はちまドボク「巨大コンクリート塊」
<https://hachim.hateblo.jp/entry/20080915/p1> [最終閲覧日2021年8月23日]
- 25) 佐藤淳一：Das Otterhaus【カワウソ舎】「神竜頭首工」
http://blog.kohan-studio.com/archives/cat_50029997.html?p=3 [最終閲覧日2021年8月23日]
- 26) 八馬智：はちまドボク「ラビリンス」
<https://hachim.hateblo.jp/entry/2016/03/12/113907> [最終閲覧日2021年8月23日]
- 27) 萩原雅紀：ダムサイト「笹流ダム」
<http://damsite.m78.com/data/hokkaidou/sasanagare.html> [最終閲覧日2021年8月23日]
- 28) 八馬智：はちまドボク「格子のダム」
<https://hachim.hateblo.jp/entry/2015/09/25/235910> [最終閲覧日2021年8月23日]
- 29) 萩原雅紀：ダムサイト「月山ダム」
<http://damsite.m78.com/data/yamagata/gassan.html> [最終閲覧日2021年8月23日]
- 30) 佐藤淳一：Das Otterhaus【カワウソ舎】「北空知頭首工」
http://blog.kohan-studio.com/archives/cat_50029997.html?p=3 [最終閲覧日2021年8月23日]
- 31) 前掲1)，p.146
- 32) 前掲1)，p.69
- 33) 前掲1)，p.100
- 34) 前掲1)，p.86
- 35) 前掲21)，p.133
- 36) 木岡伸夫：風景の論理沈黙から語りへ，世界思想社，p.178，2007
- 37) 清水真木：新・風景論，筑摩選書，p.12，2017
- 38) 前掲6)，p.244